



嘲^ワ

笑^ラ

わ

れ

る

男

祖母の危篤を聞いた。

朝5時を回ったころだった。

電話の相手は弟だった。昨日から病院に詰めていたらしい。

始発に乗れば、もつとも近い大都市の病院に入院している祖母の死に目に、或いは間に合うかもしれない。

妻に一声かけようとベッドの隣をみて、暫く家を開けていることを思い出した。

師走の盆地は一段と冷える。駅まで急ぎ足を踏んでも、汗一つかかない。

禁煙、分煙の風潮の元、ホーム端に移動した灰皿の傍で煙草を喫んでいると、男が一人ホームに現れた。嫌な気分になる。すぐさま逃げ出したい。

男はちらりと私を見た。途端に、男は私を嘲笑し始めた。

くすくす　くすくす　けたけた　けたけた

男の体は、ぼたぼた、ぼたぼたと崩れはじめ顔面の肉がはがれるのを端緒に、嘲笑う表情と声を一段と大げさにしながら、体中の皮膚と表皮に癒着した組織が、服もろともに黒々とした、とても人間の血とは思えぬ、血だまりに、ぼとぼとと散らばってゆく。

血だまりは、くすくすと心底愉しそうに嘲笑う顔を中心に、手袋のようにはがれた手だったものや、脚だの内臓だのと、その周りを包んでいた、繊維の腐り崩れた背広の上下や冬物の上着などをバラバラに乱雑に載せ、ずるりずるりとはいよつて来る。

目を背け、うつむく。嘔吐感が臓腑を駆け巡り、涙腺が痛いほど収縮し、声を出しで泣き出したった。

今日も、私の精神は平常に不調だ。

今日、あとどれだけこれを見なくては、ならないのだろうか。

幻覚とわかっていても、つらくてたまらない。家に帰り、布団をかぶって眠りたくなった。

煙草はもう根元まで燃えていた。灰皿にねじ込もうと視線をめぐらすと、血だまりの向こうに、きれいな姿勢で中空に座る、人間の全身の骨が見えた。

灰皿に煙草を差し込む前に、もう一本取り出し、一本目の残り火で火をつけた。

向こうのベンチには、身なりのよさそうな男が座っている

どうやら、幻覚はおさまったらしい。

子供のころから、私はこの疾患に悩まされている。道端ですれ違った人間や、学校の教室で傍にいた人間が、骨を除いて変質し、私の精神を責め立てながら這い寄ってくる。

変質した何かは、いかに私がおかしいかを順序立てて論証するように、私を嘲笑する。

ただ、骨だけがそうならない。もし骨ごと変質していたら、これが幻覚と自覚できなかっただろう。骨のみが、症状に悩まされる時に、底から剥離して締め付けられる私の精神を復元させる。

祖母のことを思い出そうとした。

祖母には、幼いころから可愛がられていた。両親が共働きだった私は、

学校が終わって、友人と遊ぶことのない日は、祖母におやつを出してもらったり、本を読んでもらったりと、随分世話を焼いてもらっていた。

しかし、それらの記憶は、まるで感情移入のできなかった映画のシーンを無理やり思い出すかのような作業を伴わなければ思い出せなかった。

ただ、反復されることで、摩耗して行く磁気帯のように、いつしか思い出から、記憶、知識へと後退してしまうという、徒勞のみを伴い、誘発して、ここ数年の老人から死人に変質して行く祖母の姿のみが時間軸を無視して脳裏をよぎり、苦痛と倦怠に苛まれ、私は頭を切り替えようと思った。だが、一度とらわれた思考は、意志の懇願など聞かずにあれこれと彷徨する。

もの心つくころの、最も古い記憶は、大笑するそぎ落とされて黒い血に浮かぶ父の顔面だ。そのせいか知らぬが、私は父にはちっともなつかぬ赤ん坊だったらしい。私を寝かしつけるのは、いつも祖母の役目だったらしい。母はちょうどそのころすでに年子の弟を孕んでおり、弟が生まれてからも、まだ赤ん坊の弟にかかりきりだったため、祖母が私の人格形成を担ったと言える。

当然ながら、祖母とて聖人ではない、むしろ俗物的人間だったと思う。私に言って聞かせる教訓は、いかに金銭を大切にし、家財を築くかであり、世間に恥をかかないようにどうふるまうかであった。だが、家族は誰も、一度は、母や、随分仲の良かった弟であれ、幻覚の中で私を責め立てたが、祖母がそうなることはなかった。それはたとえ祖母が老人性痴呆で猜疑心と悲観の塊となったころでも変わることはなかった。

もし、私の症状が、私の嫌悪、恐怖といった、目の前から対象の排除を求める感情の発露であるのなら、私は祖母を好んでいたのだろう。

幻覚の見えないときは、いつも余計なことを考えている気がする。かなり向こうのカーブで列車らしき影が、こちらに前照灯を向ける様子が見えた。

ホームの端のここからでは、先頭車両の停車位置からも距離がある。ま

だ半分しか吸っていない煙草を、灰皿のタールのような水面に落とすのは惜しい気がした。

急いでストローで底に残ったジュースを吸い取るように、何度もフィルターを吸り、水平向きの橙色のつららを煙草でこしらえ、難儀して妙に狭苦しい灰皿の格子にねじ込むころには、とつくに列車はホームに入りドアを広げており、駆け足で乗り込む羽目になった。

始発の空っぽの客車に安堵しながら、先頭車両の一番後ろの席の後方側の端に腰を落ち着け、ぼんやりと外を眺めていた。眺めるといつても、見えるのは、外が暗いとわからせる黒と、そこに写る無人の車内と自分の間拔けな顔くらいのものだ。

自分の間抜け面を見ないように、目線を先頭の方に見やると運転手の背中が目に残った。

背中を向けていても、しばしば幻覚に解体されてしまうことも、あった。今はない、最も症状のひどかったころは、そんなこともまま見られたように思う。

自分でも、人並みの社会生活を、よくこれまでこなして来ることが出来たものだと思う。そのころは、自分が実はこの世の真理を見ており、人間を生きながら解体できない凡人とは自分と違うと思いがつたころもあった。

自分が誰にも、狂人であるとは知られずに、周囲を偽っていられたのは、おそらくは並外れた引つ込み思案という、社会生活に不利な条件と、有無を言わすことなく、私を引つ張ってくれた、その時、その時ごとの友人たちのおかげであろうと思う。

私には家族以外に、大恩ある三人の人間がいる。

一人は、小学校の同級で♫という男だ。私の通っていた小学校には、二時間目と三時間目の間に通常の十分でなく二十分間の休み時間があつた。大人となった今から思えば、つくづく不思議なことだが、小学生のころ、二十分といえは随分な長時間であつた。

奇縁あつたのか、小学校時代六年間同じクラスだつた♫は、ガキ大将と学級委員を足して二で割らなかつたような性格の男で、その二十分休みでは、晴れの日は、校庭でドッジボールなり、けいどろなり、ミニサッカーなりと外で遊ぶことを主宰し、クラス全員が参加することを強制した。

祖母の発案で、幼稚園に通つていたため、大人数の他人が、解体され、混ぜ合わさつた肉塊が床一面に、嘲笑するという事態に会わねばならない、家族以外の他人の充満する場所での集団生活に、私はある程度の免疫があつた。

何もかもが剥がされ、抜け落ちた、白骨の幻覚を見ると正気を取り戻すという、法則を自覚したのもこの頃である。初めて大人数分の、解体と、笑い声を幻視し幻聴したわたしは、うつむき声も上げずに泣いていた。家の中で、家族がそうなつた時は逃げ出し、誰もいないことの多かつた祖父の書斎の本棚の隙間に潜り込み、そのまま寝込んで、祖母に発見されることが常だつたが、周囲を笑う血海に包囲された状態ではそうもいかなかつた。ちやうど園児たちが、教室のなかで、遊ぶ時間だつたと思う。担当教諭は泣いている私を慰めに、膝をつき、どうしたの、と問いかけてきた。血海の真ん中で、ひときは大きな肉塊となつて私を責め立て、樂し気に笑つていた彼女ではなく、真つ白な、丸みをおびた骸骨が話しかけてきた。その途端、教室の中は正常をとりもどし、周りには、私に関心など向けず、思い思いに遊び、はしゃぐ園児たちがおり、瞬きを挟む間もなく、教諭も、年若い女性に戻つていた。

それから、何度もの経験により、私は園側から引つ込み思案の社交性のない、問題ありの手のかかる幼児という評価をいただくと同時に、私自身は、幻覚からの復帰の方法を学習しつつあつた。周りの人間が崩れ落ち、私を責め立てるときは、兎に角、白骨が現れるまで、待つ。これは肉塊と血海の幻覚の中では探しても見つかるものでもなく、しかし待つていれば

必ず来るものだった。幻覚の苦痛が消えるわけではなかったが、しかしただ一つの光明だった。以来、幻覚に苛まれると、ガイコツこい、ガイコツこいと念じながら待った。

そんな状況で、友達などできるはずもなく、孤独な数年を幼稚園で過ごした後、新たに入った小学校も、同じように過ごすと思っていた。それを変えたのが、**R**だった。

Rは、小学校に入学してから初めての、二十分休みのとき、周囲にいた人間を適当に選別することなく呼び寄せた。その中に私も含まれていた。すでに幻覚に落ちようとしていた私は、彼の白骨に手首をつかまれ、人数がたりん、お前も来いと有無を言わさず正気に引き戻され、そのまま、校庭につれてゆかれた。

けいどろをするぞ、いんじゃんしよう。と**R**言った。

この地方で同年代の誰かと外で遊ぶという経験のなかった私は、“けいどろ”が警官役と泥棒役にわかれた、変則型の鬼ごっこであることも、“いんじゃん”がこの地方でのじゃんけんのことであることも知らなかったが、流されるがままにしていれば、適応できた。

以来彼は、最初に遊んだその集団を中心として、二十分休みの遊びの何らかの遊びを主宰し、いつしかその初期メンバーとして二十分休みの遊びの中核に私も勘定されていたようである。

彼は、兎に角何もかも積極的で、押しの強い少年であり、仕切り屋で、常にリーダーでいようとした。自己中心的であったとも言っているかもしれない。それ故に、対立したり、彼を嫌う人間が出てきたが、超が付くほどに消極的な、私は彼以外に友人を作ることもなく、六年間クラスが同じだったという幸運もあり、漫然と彼の腰巾着に甘んじ、小学校六年間をそれなりに平穩に過ごした。互いの家に遊びに行くという、これまた私にとって、新鮮な体験をするなど、私としては、彼とは親しい関係でいたつもりだった。なによりも幸運は**R**とともに過ごす時間、私は幻覚を見ることはなかった。つまり小学生の間、幻覚を見たのは、通学中や、家でしばし

ば、学校でも一人でいる間だけで、かなり限られたものだった。

そんなRは、私と同じく、地元の中学に上がったのだ。

私も、おそらくはRも、それなりの友人として中学も過ごすと思っていた。だが、そうならなかった。

原因は私にある。ある日、楽し気に新たな友人と談笑するRを見たとき、彼を含めたその場の人間たちが、解体され、血海に散らばって私を嘲笑しはじめた時、私は幼いころのように逃げ出した。

それから、Rは私を氣にかけていたらしく、何度か、ちょうどこの年頃の人間が覚える夜遊びなどに、私を誘ってくれたりしたが、私としては、中学の廊下のコンクリにへばりつき、嘲笑する彼の剥ぎ取られた顔面が、頭について回り、正氣のときにも、彼が恐ろしく、どうにもよそよしくしてしまいうようになってしまった。なんやかやと私を氣にかけてくれる彼を、避けるようになり、いつしか誘われなくなったとき、私はまた孤独になった。

そのころ私は、自分のこの症状が、どうも特殊で自分にしか起こらない現象であるらしいということをはっきりと自覚するほどの分別を、鈍い頭ながら持つようになった。

ちょうど、そのような年頃でもあり、他の凡俗どもとは違う、自分こそこの世の真実を見通している、などという稚拙な高慢とともに、毎日休み時間に、教室で幻視する解体され、まき散らされた、骨抜き肉塊を、吐き氣とともに、楽しむようになった。床や机や椅子に散らばる、血に浮かぶ顔面たちの嘲笑を、逆に嘲笑するようになった。内心でひきつった笑みを持ちながら、次の授業が始まり、白骨の教師が授業を開始して正氣を取り戻すまで、ぼんやりと眺めている、血の氣の失せた半泣きの私は、傍から見れば随分と気持ちの悪い存在だったに違いない。

列車が県境のトンネルに入った。気圧の変化で引き出された鼓膜を、唾

を飲み込んで戻した。ここまでの途中の駅では、誰も乗ってこなかった。空が白み始めるころに停まる駅ですでにこの列車も始発ではない、人は乗って来るだろう。

Rについて今では、顔すら思い出すことが難しくなってしまった。ただ、苦い記憶、どうしても修復しようのない破綻を引き起こした後悔だけが、残ってしまった。

転機があった、人生二人目の友人との出会いである。

二年の夏休みに、読書感想文の宿題が出た。

濫読家だった祖父の書斎には、多くの種類と、十分な量の本があった。中学が終わると、私は急ぎ足で帰り、そこで書物の世界に耽るのが常であった。ひと昔どころかふた昔前の流行小説や、歴史もの、新書版の雑学書など、簡単な部類の本が私の好みだった。本ばかり読んでいたせいか、それまでの定期試験は、国語が突出した成績だった。読書感想文なども、適当にそこから選んだ小説で、でっち上げた。

それが、表彰されてしまった。戦前に流行った、まだ旧仮名使いのその小説について、戦雲たなびく時代背景を照らして、適当に一夜で書いたものだったが、どうもそれが平和教育に熱心な市の教育委員の琴線に触れたらしい。

学校の全校集会で表彰され、今度は市の方での表彰があると、担任に職員室で言われたときは、柄になく浮かれた。私の高慢が絶頂となったのはそのころである。

市の会館で、何人かの私と同じような学生とともに集合させられた私は、客席の最前列の端に、他の学生たちとともに並んで座らされた。表彰式はまず受賞者全員がその作文を朗読し、その後表彰の運びらしかった。聴衆が入る前にリハーサルを、無人の客席に向けて簡単にすませた。

何人かの学生の感想文を聞き、ついに私の番となった。

演台に上り、聴衆に向いた途端、私はパニックに陥った。バブル期の放漫財政で無駄に贅沢に作られたその会館は、客席がすべて、赤いいかにも高価そうなシートが張ってあった。

だから、私ははじめ聴衆が一斉に消え失せたのかと錯覚した。

錯覚通りならばどれほど良かったか、すぐに私は気づいた。会館全体、文字通り血の海に見えた。よく見ると、腸のような桃色の塊や、肺か脾臓か脂肪かしない黄色の塊などが散らばっている。それらの色で斑になっている会館いっぱいの血海は、やがてぶるぶると震えながら、幾百という人間の顔を徐々に浮かび上がらせてきた。幾百の顔は一斉に目と口を三日月型にゆがめると、しんと静まっていた会館全体を振動させる大音声で笑い始めた。

私は嘲笑に耳をふさぐことも、幾百の顔から目を逸らすためにうつむくこともできず、ただただ立ち尽くしていた。

どれだけ、そうしていただろうか。数分はそうしていた気がするが、あとで時計を確認し、一人当たりの持ち時間から考えるに、あるいは数十秒だったかもしれない。

「頑張れ。」

と、女の声が聞こえた。その方向に、なんとか目を向けると、私が座っていたあたりに、一体の白骨があった。

現実に戻された、一つだけ空いた席、の隣の片方に座った少女が、私をみていた。

彼女が叫んだらしい。学ランのような金ボタンに詰襟の随分変わった制服だなど、見当違いのことを考えた私は、はっとして自分の作文を読み始めた。

無事読み終えた私は席に戻った。その途上に恩人とすれ違い、小声でありがとうと言った、彼女は微笑んでくれた。

それがSとの出会いだった。

市での式の終わり、解散の運びとなった時私はSにもう一度礼をいった。Sは、誰でも上がることはあるよと私を慰めてくれた。

帰りの方向は、Sと私の中学が隣だったこともあり、途中まで同じだった。

Sの顔は、私には女にしか見えず、声も女の甲高い声だったため、私はなぜ、彼女が下にズボンをはき、男子学生のような格好をしているか、そして一人称が一般に男が使うものか謎だったが、私には初対面で聞く勇氣はなかった。

感想文で受賞するだけに、Sも読書家らしく、好きな作家について語り合った。といっても、Sの言う最近の作家のことは、私は全く分からなかった。正直に知らないと言うと、今度貸してあげると言う。そこで次の週末に市立図書館で待ち合わせる事となった。

小学校のときRと遊ぶ時はもっと活動的な遊びをしていたため、私はその時初めて図書館なる場所に行った。残暑の中、結構な距離を歩くことは、それなりにつかれる作業だったが、私は心が躍っていることを自覚した。その途上は珍しく幻覚をみなかった。通学中は頻繁に見る通行人らしき、肉塊がずるずると血に乗ってくすぐすと笑いながら過ぎ去っていく姿は、いつも油断しているときにやってくるもののなのに。

Sの貸してくれた小説は中々に面白かった。その次の週末にまた図書館で待ち合わせて、小説を返したときにそう告げると、Sは喜々として、同じ作者のシリーズものがあるといった。私はそれも読んでみたいが、こちらが借りるばかりでは申し訳ない、何かこちらもおすすめのものを持ってくるよと約束した。

Sとの週末の図書館の会合はいつしか慣習となった。好きな本の話をし

て、後は各自図書館内で本を読んだり、持参した本を貸しあったりした。互いに下の名前も知らず、電話番号も交換せず。会うたびに、また来週ここで、という非常に前時代的で互いに一步引いたものだった。しかし、それは私にとって心地のよいものだった。♫がつねに男装なのも何時しか聞く機会を逸したが、どうでもよいことに感じた。

だが、その習慣が、何回か互いの都合で、待ちぼうけをしたり、会わない週があるなどしても、師走にまで至った時、私は不安を覚え始めた。

私は学校で孤立しているが、♫はほぼすべての週末私と会う以外どうも予定はないらしい。あの市民会館での失態以来、高慢は鳴りを潜め、逆に劣等感に支配されていた私は、♫のような人物に、友人がいらないとは思えなかった。そうなる私と彼女の時間を浪費させる存在ではないかと不安になった。

冬休みの初日、ちょうど週末だった。来年度からは公立学校は完全週休二日制になるらしいという朝のニュースを聞いた後、いつものように歩いて図書館に向かうとき、私は♫と会う日だというのに、幻覚を見た。冬の低くなった青空の下で、寒そうに体を振動させながら這いずる幻覚は吐き気を覚えるほど苦痛だった。

♫は私よりだいぶ早く来ていたのか、小刻みに体を震わせながら、律儀に図書館の正門前で待っていた。

♫は、おはよう、寒いねと言った。うん、とだけ私は答えた。

貸してくれた本返すよ、やっと読み切れた。♫はカバンから私がいかに前に貸した本を取り出した。戦時小説ですでに絶版しているそれを読破するのに、随分時間がかかったらしい。

旧仮名使いはいまだに慣れないし、旧字体はさらに大変だよ、でも面白かった。今の小説にない趣があるね。

朗らかに語る♫に、楽しんでもらえてよかった、寒いし中に入ろうと言うと、今日は違うところに行かないかと言う。

「行くつて、どこに」

「神社」

まだ表情は笑っているが、眼が悲し気だった。つい数瞬前の笑顔ももしかしたら、朗らかでなく、乾いていたのかもしれない。

♫の後について、市の中央の人通りの多いところから、農地がまばらに見えだし、県境になっている山間に近いところまで来た。

♫は少し足早になった。小説のことを話していたが、そろそろ話題が尽きてきたころ、農地の中に浮かぶ孤島のような、鎮守の森が見えた。

「ねえ、君は靈感つてあるかい」

神社は昔 R とその友人と一緒に遊んだことのある場所だった。ちょうど S の中学校の校区と私の中学の校区の境界らしい。参道に平行な三人掛けベンチに何を話すでなく、一人分けて、互いに端に座っていると、♫はそんなことを言い出した。

私を見る幻覚は靈感の一種だろうか。宗教について論じた本に、原始宗教における巫覡は精神疾患や薬物中毒によつてみた幻覚を神としたという論があつたため、そのような意味では私も靈感もちといえるかもしれない、と思つた。

「ないよ」

嘘をついた。いわゆる靈感が見るものは、死者の意志や姿だろうし、なによりも♫ならば、幻覚のことを話してもよいのではないか、という誘惑は甘美なものだったが、もし狂人と幻滅された途端、この関係は破綻してしまうと思つた。

「ないか、残念」

自分にもないと告げてから、彼女は続けた

「詩人は狂える靈感により、地獄に収まらぬほどの悪魔をと、天上よりあふれ出る天使を見る」

「何かの引用か」

「オリジナル。でも、きつと何かの引用の継ぎはぎさ」

「僕たちは、本を読むのが大好きだけど、読むに足る何かを書けるわけじゃあない。書けたら素敵だろうけどね」

「そうだな」

話はどうやら文学論のようで、やはり嘘をついて正解だったと、私は思った。詩人の靈感にしては、私を苛む幻覚は、あまりにお粗末だ。単なる疾患、機能障害だろう。結構な雑学書を読んだが、精神疾患についての本は、ついに手を出す気は起きなかったなと、ふと思った。

「でも、あつたらいいとは思わないかい。靈感じゃなくてもいい、超能力とか、異世界に行くとか、タイムスリップとか⁵⁴やオカルトチックなことが」

「そうかな」

「いいよ、素敵だ。嫌な日常に比べたら」

たとえ如何なる非日常も、いずれ日常に飲み込まれる。最近読んだ評論を思い出した。きつとどこに行こうと日常になる。そして、苦痛もついてくるのだろう。人間である限りの運命のようなものだ。運命と書いて“さだめ”と訓読してもいい。そのことを話そうと思ったが、やめた。

「大晦日、一緒に初詣にここに来ないかい。」

しばらくの沈黙の後、不意に⁵⁵が言った。

「初詣か」

オウム返しに言って、思案した。我が家は基本的に初詣に行かない。家長たる祖父が熱心な無神論者であったためだ。

「いいよ、行こう」

大晦日、深夜に出ていく私を、起きていた祖母がとがめた。しかし、友人と初もうでに行くと言った私に、祖母は嬉しそうにいった。

「R君とかい。あの子、元気にしてるのかい」

Rと疎遠になったと知らない祖母の言葉に、後ろめたさと、悲しさで言葉につまりつつ、適当にはぐらかし、別の友人だただけ告げて家を出た。

いつてらしい、気をつけてね、といううれし気な、祖母の見送りの言葉に泣きたくなった。

場所は先日の神社だった。Sの家はここに近いらしい。神社は正月だというのに、誰もいなかった。周囲が農地で、伝統を大切にしていそうな土地に見えるのになど、不思議に思ったが、人込みでなければ、幻覚を見ることもないとSに内心感謝した。

「このあたりは、仏教が強くてね、この神社は実質放置されているのさ、神社を統括する役所から人は時々来てるみたいだけどね」

鳥居の前で、ここで年が明けるまで待とう、といって立ち止ったSは説明してくれた。

「神社本庁は役所じゃないぞ、あれは宗教法人だ」

「そうなんだ、役所みたいな名前なのに」

「戦前までは役所だったがな」

他愛もない会話をしながら、腕時計で日付が変わるまで待った。

深夜零時を二人共の時計で念入りに確認し、鳥居を一礼してくぐった。先日眼の端に見た手水舎の水は、随分濁っていたことを思い出し、清めは省略した。後ろの道路の街灯だけで照らされた参道を進み、薄明りの中、少々難儀しながら賽銭を投げ入れた。

霊験あるならば、幻覚を消してくれ、生まれて初めて神に祈った。

Sは随分熱心に祈っているようだった。かなり長めの祈念を終えた彼女の眼尻は確かに濡れていた。

何を祈ったのかは聞けなかった。Sも私に問うことはなかった。

境内のベンチに、先日と同じように座っていると、遠くから談笑する声が聞こえてきた。どうも自転車に乗っているらしい。金属のきしむ音とともに、その集団は鳥居の前でおのおの自転車を停めた。逆光でよく見えないうが、どうも同年代らしかった。

幻覚は見たくなかった。

神頼みは通じなかったらしく、彼らはぼとぼと地面に崩れ落ちた。嘲笑は鎮守の森を震わせるほど大きく響いた。

視線をωに戻すのが怖かった。ωの時と同じく、せつかくの友情を失うことは嫌だった。

「もう帰らないか」

後ろから、ωが言った。

「ああ」

つとめて振り返らないようにして、ωを背後に鳥居まで歩き出した。幸いωは幻覚と私を結んだ直線のちょうど反対のあたりに立って、私の視線に入らないように歩いてくれている。視界に入らなければ、大丈夫だ。ωが解体されることはない。自分に言い聞かせながら歩いた。けたけた、くすくすという血海に浮かんだ肉塊たちは、中心の顔面で私を嘲笑しながら、ずるずると進み、私の進路を遮った。

顔面たちは、急に怒りの面相になった。

初めてだった、肉塊が嘲笑以外の、表情を表すのは。どうしようもなく立ち止まっていると、不意に一つの白骨が立ち現われ、私に殴りかかってきた。

かばうでもなく、それを頬骨のあたりにまともに食らった。随分な激痛で、脳髓が揺れた。しかしそれでも、ただでさえ辛い幻覚から正氣に戻してくれたことが嬉しく、思わず笑みがこぼれた。

五、六人の少年、少女だった。

私を殴ったらしい、少年はなにか怒鳴っていたが、滑舌が悪いのか聞き取れなかった。

どうも怒らせてしまったらしい。謝ろうかと思ったが、こちらは悪いことなどしてないつもりだった。しかし幻覚を見ているときに、何か言われ、それを無視したならば、私に非がある。いや、やはりいきなり殴ることはないだろう、と思い直した。私は悪くない。

少年たちは、口々にキモイ、キモイと連呼した。自覚しているとはいえ、面と向かって言われると、かなり傷つくものだ。だが、幻覚の苦痛ほどで

はない。初めて幻覚に感謝するべきだったかもしれない。

今日は初めて経験することが多い日だ。きつといい日に違いない。

氣をよくした私は、感謝の意味を込めて、心底から笑みを浮かべ、通してくれないか、と彼らに言った。

結局、私が非常に気持ち悪かったためか、彼らは道を開けてくれた。

「ごめんなさい」

♫が急に謝った。

「なんで謝る」

理由がわからなかった私は、聞いた。

♫が語った内容は意外なものだった。あの少年たちは彼女の同級生たちであること、彼らから♫は悪質ないじめをうけていること。堰を切ったかのように彼女は語った。

どうも少年たちが攻撃していたのは♫の話しぶりからすると、私ではなく♫だったらしい。

週末、いつも時間があつた理由がわかった。

私のような破綻した人間ならば、周囲から排除されても文句は言えない。しかし彼女のような、善性で知的な人間がなぜいじめられなければならないのか。♫が言うには入学当初はうまく人間関係を運べたらしいが、もともと出しやばりがちな性格だった彼女は、周囲から徐々に嫌悪を買ったらしい。その積極性に私は随分と救われたが、反発する人間もいるらしい。そういえば、やはり積極的な性格だった♫を、ひどく嫌っている人間もいたことを思い出した。

自分も学校では孤立している、と言って励まそうかと思つたが、何の慰めにもならないと気付いてやめた。

「あと一年と少し我慢すればいいから」

自分に言い聞かせるように、語る♫に私は言った。

「同じ高校目指さないか、見知った人間がいるときつと良いと思う」

自分で言って驚いた。

「それは素敵だね」

♫の顔が、いつもの文学少女然とした表情に少し戻ったのを認め、わずかだが安心した。

あの夜以来、いじめは直接的なものから無視にかわつたらしい。そのことに感謝されたが、あいにく理由は不明だ。外部であつても協力者がおり、しかもその顔を知っているなら状況も変わるのかも知れなかった。

随分と楽になった、と♫は言った。学年が上がりクラスが変わり、状況がさらに改善すればいいと思った。

次の夏、本格的に受験勉強に入るころ、♫と下の名前と連絡先を交換した。無論相変わらず苗字で呼び合ったが、学校で禁止されていた携帯電話の所持が、教育委員会の方針転換で許可されたころ、その通達を見て父に持たされた携帯電話で、♫と番号とアドレスを交換した。

♫は小学校のころから持っていたらしく、律儀にそんな決まりを守っている人間を初めて見たと、ころころと笑った。

朝日が臉を温めた。眠っていたらしい。どうせ降りるのは終点だが、少し不安になり時間を確認した。

周りを見るとまばらだが、乗客がいた。♫と出会ったころの、ほぼ記憶通りの夢を見ていた。なつかしさに頬が緩みそうになった。悪い癖だ、外出しているときは気を張っていないくては、駅のホームの二の舞だ。これでも若いころよりは症状はましなのだ、見知らぬ他人がいるところで、気さえ弛緩させなければ、幻覚を見る確率は減る。教師というまるで適性のな

い職についてしまったために身に着けた、内心と表情の乖離の習性は私の症状の治癒に随分役立ったらしい。

私のような、性格、能力ともに社会不適合がふさわしい人間が職にありつけたことは、いくつかの幸運による。

「は大学の二年年上の男だった。いまでも彼を私は先輩と呼ぶ。

非社交的な私が、「と知り合ったのは、やはり」が積極的に他人と関わる性質の人間だからだ。

Sと私は、目論見通りに、同じ県外の公立高校に入学することが出来た。その後大過なく高校生活を、帰宅部で満喫した。

Sとの関係は、互いに別の大学に入学した後も、現在まで継続している。

自分の学力に見合った、適当な公立大学の文学部に入学した私は、漢文学を専攻した。

理由は、極めて消極的なもので、最も人気がなかったからだ。

当時日本の漢文学会では、訓読式の漢文解釈が力を失い、漢語そのままに読んで解釈する中文派が、主流だった。訓読式を続ける、私の研究室の老教授は非主流派にいただけあって、頑固で偏屈だった。

所謂二呂、呂祖謙、呂祖僉兄弟研究の日本での第一人者を自称する、浙東功利学派の生き字引のような老人は、多くの少数派がしばしばそうなるように、学会の方針に反発し、自らの研究室の方針を一層先鋭化した。学生たちは、訓読における、時代ごとの差異に細心に細心の傾注が要求された。特に、博士家各家の訓読を、しかも各家流の分派の訓読まで全て諳ん

じろ、などどやされた学生までおり、老教授は、研究室に所属する数少ない学生の恐怖の対象だった。

彼は私が最も高頻度で、肉塊と怒鳴りつける白骨を見た人間だった。

肉塊に浮かぶ顔面は、すぐに憤怒の形相になり、怒鳴りつける白骨になり、また肉塊になり、白骨にどやされと、教授にどやされるたび、明滅する切れかけの蛍光灯のような光景は、奇妙なものだった。

幻覚の中にいるときの私は、ウの同級生たちとひと悶着あった時もそうだったらしいが、非常に不遜に、黙しているように見えるらしい。「一指摘されて、私は初めて知った。私が教授にどやされた回数がすでに、両手どころか、足の指を使っても足りなくなったころ、あまり交流のなかった私に」は言った。

「お前もよくやる、十回以上先生に、二度と顔を見せるなど言われているのにな。そんなに漢文訓読が好きかい」

幻覚に落ちているとき、私は周囲の言葉が聞こえない。それほど言われたのだろうか。

私が驚きで、だまっていると、「は続けた

「先生も、お前の根性には、辟易しているらしい。その一点に於いてのみお前は見どころがあるとき」

根性でもなんでもなく、ただ幻覚の中で、教授の肉塊と白骨の明滅に嘔吐を我慢していただけだ。

その日以来研究室で幻覚を見る頻度は、格段に減った。

「は優秀な男で、教授のお気に入りであった。教授の無茶な要求に常に答えた。正直呪文にしか聞こえない菅家流や清家流の、東萊左氏博議の訓読をすらすらと諳んじる様は、頭脳の差というものを自覚せずには居られなかった・

「はいろいろと顔の利く男だった。県内の予備校や塾の漢文教師に、知り合いでない人間は居ないのではないか、と思えるほどで、私たち下級生だけでなく、場合によっては自分の上級生の働き先まで、口を利いた。

私も無論のことそれに甘えた。今のいくつかの高校での非常勤講師と予

備校講師の職も、彼に利いてもらつた縁を始めに着けたようなものである。

また、学内の他の研究室との人脈も同じほか、それ以上に豊かで、非主流派の我々が、卒論でどの素材を主題とすれば各教授の好感を得やすいかなどの情報収集を行い、それは常に正確だった。

そんなフィクサーまがいの働きをする「だった」が、けつして親分肌といった男ではなかった。金銭での直接支援、ようはおごりの食事やレクレーションのようなことは、一切しなかった。人脈だけで、恩をあらゆる場所に売り、それでいて金銭等の吝嗇をしめすことで、あえて完全に自分の評価を決して上げ切らず、適度な位置にとどめるという離れ業をやつてのけいた。政治家にでもなるつもりかとも思ったが、老教授のもとで助手となることが確定した「の様子から、どうも学会での地位向上を目指しているらしかった。

学部卒で院に進まなかった私は、教授の主宰した卒業祝いの飲み会で（この点老教授はこのような催しを自腹でするように、政治的駆け引きとは無縁の古風というか不器用な男だった）

会のしめに研究室の幹部たちが各々言葉を述べた。

「学会の現状は、すぐに変わる。院に進まない卒業生はあるいは今日限りで今生の別れになるものもあるかもしれない。しかし諸君の大半が進む受験業界においては我々はいまだ主流派だ。大学においてもすぐに反動がくるので、安心して欲しい」

と「は述べた。

その後、助手が当たり障りのない、贈る言葉を述べ、最後に老教授の番となった。

「宋代、当時の儒者の二大巨頭、朱熹と陸象山が人倫に於いて、性即理と心即理の二論を戦わせ、呂祖謙の招きで、鵝湖に於いて対面しての激論でむしろ喧嘩別れにおわつたことは、諸君らもよく知るところである。この儒学における一大論争は、結局は喧嘩別れに終わった。学説ならば強情をはるだけで良い。しかし諸君らがこれから生きる実社会では正論同士の戦いはもちろん、悪論により正論がねじ伏せられるようなことも、目撃し、

また当事者となったとき、あるいは屈原となり、あるいは秦檜となるかも知れぬ。そのような事態に陥ることはなくとも、艱難は常に小さくとも必ずあるだろう。いかなる場所で働くにせよ、修養とは功利学派の二呂や葉適の解くところのように具体的事物に於いてこそ成る。日常に埋没せず、空理に逃げることなく、日々直面する経験を大切に修養に努めれば、道は自から体得できるだろう。諸君の奮励を祈る」

老教授はどこまでも漢学者であつた。

「とは今生の別れとはならず、その後も連絡をとりあつてゐる。今度は私が業界の内情を流す側だつた。いつの間にか」の形成する派閥の末端である。「の嗅覚が正しければ、」は勝ち馬に乗っていたはずであり、おそらく今後私が食いはぐれることは、暫くないだろう。

列車が終点に着いた。ターミナルだけあつて、人間が多い。起き抜けにホームで幻覚を見た時の憂鬱は消え去つていた、この分ならば、覚醒している間は幻覚を見ることはあるまい。

私の幻覚の原因は不明のままだ。

それは、承認欲求の暴走なのかもしれぬ、過度な人間不信なのか、あるいは脳髓の形状がおかしいのかもしれない。全く別の、本物の霊感なのかもしれない。だが現状、年を経るごとに私の感覚は、現実と調和している時間が伸びている。

真理を問わずとも、事象に対処は可能だ。幸運なことに現在に対処できている。現実主義に見せかけた現状主義で、今後もなんとかなるかもしれない。

できる限り速足で病院に向つた。煙草をやめねばならないと、呼吸への負担を大いに感じながら、時計を確かめた。七時を回っている。仕事

の性質上、今の居を離れられない私に代わり、私の実家を手伝ってくれて
いる妻の携帯電話に電話をかけてみた。疲労感を感じさせる声は、かつて
夢見がちで、繊細な文学少女だったとは想像しがたい、しかし愛すべきも
のだった。

「おばあちゃん、まだ持つてる。急いで」
「わかった」

雑踏のどこからか、けたけたと嘲笑うこえが聞こえ、すこし吐き気がし
た。

終